# 述平の描く「事件」について

鷲巣 益美

［1］はじめに

述平という作家の名を初めて目にする方も多いことと思う。

一九九九年春、下北沢にできたばかりのミニシアター「シネマ下北沢」で上映された「趙先生」という映画の原作者であり脚本家でもあるのだが、この作品は脚光を浴びるには至らなかったようだ。帰りがけにチケット売り場でプログラムはないかと尋ねた際、係員嬢がやや不安げに「どうでしたか？」と聞いてきた。頓珍漢ながら肯定的な答えをしたつもりだったが、彼女の表情は変わらなかった。プログラムは用意されていなかった。

二〇〇〇年のカンヌ映画祭で、事実上の第二位である「グランプリ」を受賞した姜文監督作品「鬼子来了〈日本兵が来た〉」の、四名の脚本家の一人でもある。

九九年九月初旬、旅途長春に立ち寄った際、首尾よく述平に会うことができたので、そのときに聞いてきたことを随時引用する。

［2］述平の略歴

述平は長春在住の作家で本名は王述平という。一九六二年十一月二十日、吉林省梅河口市に生まれた。三人兄弟の長男で、弟も妹も名前は「述」の字で始まるそうだ。原籍は莫言と同じ山東省高密県だが、鉄道関係の労働者である両親は一九五八年に山東省から梅河口に移住してきたのだそうだ（深読みすれば、飢饉の始まった「五八年」という年に糊口をしのぐため故郷を離れたとも、山東人が新天地を求めて東北地方に移住するという伝統によったともとれるが）。「偽満」（「偽満洲国」の略で、中国における「満洲国」の通称）時代は梅河口にも日本人はいたはずだが、そういう事情で昔の日本人については何も聞いていないと言っていた。両親が労働者だったので文化大革命で辛い思いをしたことはなく、何やら騒いでいる連中がいたくらいの印象しかないらしい。

彼の自伝を読むと、自分のルーツにはさほどこだわってはいないように思われる。偽満時代の首都・長春に住んでいることについても、特に思い入れはないようだ。この世に生まれて以来、自分の記憶の中にある時代にしか興味がないらしい。

八四年に大連軽工学院機電系を卒業したが在学中の成績は……。幼い頃から文学が大好きだったというので、じゃあ何で理系に進んだのかと尋ねたら頭のいいやつは理系に進む

時代だったからという返事。これは私もかすかながら身に覚えがあるので納得した。自伝にはたしか、親の勧めを押し切れずに……と書いてあったが。

物心ついてから大学時代まで、むさぼるように文学を読んだというので実際どんな作品を読んだのか、好きな作家は誰かと尋ねたら「いっぱいいる」という答えしか返ってこなかった。具体的な名前を挙げることによって自分自身が限定されることを恐れたというより、ほんとうにひとつに絞りきれないようだった。

インタビューの際、話のネタにするつもりで「偽満」時代の長春や大連の地図を見せたら目を皿のようにして見入っていた。後日街を歩くために必要だったのでその場で贈呈できないのが残念だった。どうやら作品や述平自身のことについて、ストレートな質問をして答えてもらうよりも、どうでもいいような世間話や私自身についての話をして、その反応を見るのが正解だったようだ。

考えてみたら私が初めて中国を訪れたのは述平が大学を卒業した直後、改革開放政策が始まった頃だった。同級生の多くは、おそらくエンジニアとして就職していったのだろう。彼はまず生まれ故郷の梅河口市経済技術協作弁公室に勤め、その後長春の『新文化報』（新聞社）、『大衆健康』（雑誌社）などで働いた。八六年、長春市内に編集部をおく月刊誌『作家』でデビュー、これまでに三十篇余の作品を同誌を中心に発表している。

現在は市内にある美術学校教師の妻と二人暮らし、吉林省作家協会に所属する専業作家だ。いわゆる「DINKS」である。映画の脚本を書き始めた頃から小説はほとんど書いておらず、九七年春以降は新作の発表がない。

述平は前号の会報で取り上げた李馮と同世代に属し（そういえば李馮も文転組だった）、中国ではいわゆる「新生代」、「晩生代」作家の一人に数えられている。転載・収録の頻度の多いものに「上天自有按排」、「凸凹」、「晩報新聞」があり、このあたりが中国で注目されている作品とみてよいだろう。なお拙訳に「これでいいんだ」（原題［我看這様挺好］、『中国現代小説』第Ⅱ巻第五号）、「一九七六年の撮影」（原題［撮於一九七六年］、同誌第十四号）がある。

［3］短篇作品について

述平の作品を読んでいると、作者自身が話を組み立てることを楽しんでいるように感じられることが多い。それはパズルをひとつひとつきっちり組み合わせるというより、一箇所しか噛み合うところがないものを、微妙にバランスを取りながら立体的に組み立てているように思われる。出来上がったものは、中心部に空洞を抱え込んでいる。物語の中心となり、話を動かしていくことになる核心たる事物や人間の姿形が見えないのだ。

人間が目に見えない何かによって動いている、或いは動かされている。その実体は何な

のか？　これは古今東西多くの人間が追求してきた問題のひとつであろう。述平もこのことをテーマのひとつとして描いてきた。

それを伝説めいた超自然現象に求めたのが「北方迷幻」であり、心霊現象に求めたのが「町住野狼」であり、幼い子供にしか見えない不思議なものに求めたのが「老頭児」である。これらを読んだとき、中国では数少ないミステリーやサスペンスを描く作家になるのだろうかという印象をもったが、現時点ではその気配はない。どうやら、最も得体の知れないのは人間自身だということに落ち着いたようだ。

短篇のなかで最もまとまりがよいのは「一九七六年の撮影」と思われる。述平自身も短篇のなかで最も気にいっているそうだ。

ストーリーはごく単純で、小学校の教室のドアに落書きをした犯人探しの顛末である。

ある日、普段どおりに主人公が小学校に登校すると、ちょっとした事件が起きていた。ドアにこんな落書きがしてあったのだ。

> 寧先生と馬先生は夜になるといつも学校で一緒に体を鍛えてる、馬先生が上にいて、寧先生が下にいる、馬先生は動くけど、寧先生は動かない、でも寧先生は叫ぶ、机はきしむ。

学校側は犯人を見つけるため、書き取りのテストと称した筆跡鑑定を行う。それも右手と左手の両方でだ。教師が読み上げる文章をそのまま書くというものだが、文章には落書きにあった文字がすべて使われており、内容的にも「自首」を促すようなものだった。主人公は犯人の筆跡と自分が左手で書いた筆跡の共通点に気づきひやひやする。情報通の親友がそれに気づいたばかりか、先生に叱られた腹いせにやったんだろうと詰め寄り、文章のセンスがあるといって主人公をからかう。全く身に覚えがないのに、主人公は情況証拠によってしだいに追い詰められてゆく。彼を追い詰めたのは、自分が犯人にされそうだということはもちろんだが、犯人と自分に共通する心理状態でもあり、顔の見えない犯人に対する恐怖でもあった。いよいよ呼び出しを受けると覚悟したその日、毛沢東逝去のニュースが飛び込んできて落書きの犯人どころではなくなり、事件はうやむやにされる。

身に何の覚えもない主人公を、担任教師や親友ら周囲の人間が次第に追い詰めてゆく過程は、単純に考えれば作品の設定された一九七六年当時の世相を反映させたものである。かつて日本で放映されたテレビ番組（日時、タイトル失念）のなかで作家の劉賓雁が「追求されているうちに、身に覚えのないことであっても相手の言うことの方が正しいように思えてくる」と語ったように、無実の人間の言葉尻をつかまえて犯罪人に仕立て上げるということが頻繁に行われていた頃の。毛沢東がいなくなって犯人探しがうやむやになったことも、その後の四人組逮捕などの政治情勢を考えると何やら暗示的だ。

だがその一方、子供が教師をからかい、教師はそれをおさえるのに妙に躍起になること

があるのは何も中国に限ったことではない。いつの時代にもどこの国でも見られることだろう。仮に作者の名と国籍を伏せ、登場人物の名もアルファベットに置き換えて誰かに読ませたら、その人は最後の二段落を読むまで中国の小学校が舞台であることに気づかないかもしれない。

呼び出されるのを今か今かと緊張して待っていると別の大事件によって帳消しになり、町じゅうに重苦しい雰囲気に包まれているというのに主人公はどこかほっとしている。だが、自分の感情と国の指導者の逝去を悼む人々との感情のちぐはぐさから、主人公はまた何かを考えたのだと思う。ほっとしたまま忘れてしまうことなく。だから、落書きの犯人探しは中止されたが、事件自体がおしまいになったわけではないのだ。

事件自体と、その事件によって引き起こされたこととの微妙な「ずれ」が、またひとつの新たな事件を作り上げてゆくのである。これは述平の他の短篇にもよく見られることだ。

［4］脚本と中篇作品について

述平が初めて映画の脚本を手がけたのは一九九六年のこと、張芸謀監督作品「有話好好説〈きちんと言いたいことがある〉」だ。姜文と李保田が主役を張ったこの映画は述平の中篇小説「「晩報新聞」が原作で、日本では未公開だが中国の新聞や雑誌にはしばしば大々的に取り上げられた。筆者は述平にこの映画のVCDをもらった。監督から数回にわたって書き直しを要求されたということで、脚本はとても大変だと言っていたが、映画の仕事に携わることによっていろいろな人と知り合ったり、海外へ出かけたりするのを楽しんでいるようにも見受けられた。

そもそも張芸謀監督が都市に生きる人々を描こうとして目をつけたのが述平の中篇小説で、単行本『有話好好説』の裏表紙には「最初われわれは述平氏の五編の中編小説をもと三本の映画を作る予定だったが、うまくいかず結局『晩報新聞』をもとに『有話好好説』という映画をつくった」という監督の言葉が書かれている。中国において「農民監督」と呼ばれていること（二〇〇〇年六月二十六日付読売新聞記事による）を、意識してのことだろうか。

この映画が取り持つ縁で、姜文監督の「鬼子来了」の脚本にかかわることになったのかもしれない。河北省唐山市あたりでロケを行い、日本兵役で香川照之らが出演したほか、北京にいる日本人留学生が何人かエキストラとして参加、述平自身も国民党の兵士役で出ているということだ。

さて張芸謀が目をつけたとおり、述平の中篇はみな都会を描いた作品である。具体的に言えば自身が住む長春を舞台にしたものがほとんどだ。都会に住む人々が動きまわり触れ合うなかで、事件の芽や事件そのものが発生する。

『晩報新聞』は、高校時代に好きだった同級生に再会した男が、昔彼女がくれたと思われるコートの話を持ち出し、彼女の気持ちを問いただす。彼女は知らないと言い張り、男のストーカー行為が始まる。最後に男は、彼女への対応の仕方を助言してくれていた同僚をうるさがり、その同僚を刺してしまう。章と章の間に新聞記事の報道文の形でいくつかの事件がはさまれているのが特徴で、事件とは無関係のところにいた男が、次第に犯罪者に近づいていくのを暗示しているようだ。

『凸凹』は、離婚の危機に直面した夫婦の話。妻は出張帰りの帰途、原因をつくった雑誌記者と大学時代の同級生を追及に行き、その間に夫は留守の隣人を訪ねてきた女性と深い仲になってしまう。妻は離婚を決意して家路につき、夫はやり直そうと考えるところで話は終わる。

『某』は、脳腫瘍の手術が失敗して夫を亡くした妻が、遺品を整理しているうちに見知らぬ人に宛てた女性からの手紙を見つける。実は夫は出張先で作った愛人に偽名を名乗っており、女性はその愛人だったのだ。何も知らないふりをして、妻は架空の人の知り合いを装い夫の死を告げに行く。愛人にプレゼントを渡して帰るが、愛人がそのプレゼントを開けると、妻がすべてを知っていたことに気づく仕組みになっていた。

前述の映画「趙先生」は、『凸凹』と『某』を組み合わせたような話だった。

『此人與彼人』は、出張中に深い仲になった男女の話。舞い上がる女と、妻にばれるのを恐れておどおどする男とを面白おかしく描いている。彼らのほかに妙な性癖をもつ男女がもう一組描かれるが、肉体関係入り乱れという感じでいまひとつすっきりしない作品だ。

『一張白紙可以画最新最美的図画』は、述平自身が最も気にいっているという作品だ。大学を卒業したての若者が、就職先の工場で巻き起こす話。前置きとして堂堂巡りの昔話があり、「第一稿」から「第九稿」まで九つの部分から成り、それぞれ冒頭の一文は全く同じ、「一九八六年夏、一人の大学生が卒業した。彼は卒業するとすぐにある中規模都市のある大きくない工場に振り分けられた。工場に来るということはすなわち彼がここから社会に入ることを意味する」というものである。同じ書き出しで始まるが、話はそれぞれ少しずつ変わっていく。話が完成するまでに書き直したもの全てを並べたような形だ。しかし最終章である「第九稿」は、引用した出だしの文章のあとに「……」がつき、さらに改行して「……」だけで終わっている。何度も何度も書き直すうちに、どこまでどんなふうに書けばよいのかわからなくなって筆を置いてしまったのか、それともこの作業が永遠に続くという暗示なのだろうか。

いずれの話も、中心になるのは男女関係である。親子、兄弟姉妹、親類、隣人、同級生、友人、といった様様な人間同士のつながりの中で述平が最も関心を持っているらしく、どうも言葉では説明のつかない不思議なものがあると認識しているようだ。

［5］終わりに

九七年を最後に雑誌に作品が載ったのを見たことがなく、本人に確かめたところ確かに書いていないという。この時期は脚本に専念していたようだ。今後の予定を尋ねたら、中篇を書く構想はあるということだったが、実現するのはいつになるのだろうか。

［付］述平作品目録　＊は二次的資料による。

雑誌掲載作品　（短）＝短篇、（中）＝中篇、（談）＝創作談

| | |
|---|---|
| 北方迷幻（短） | ≪作家≫86－12 |
| 山崩（短） | ≪作家≫86－12 |
| 想想想想（短） | ≪作家≫87－1 |
| 老頭（短） | ≪作家≫87－4/5 |
| 我姐姐（短） | ≪上海文学≫87－6 |
| 我是男人（短） | ≪作家≫87－9 |
| 名字（短） | ≪上海文学≫87－11 |
| 十六歳那年我暗暗地笑了一回（短） | ≪作家≫88－2 |
| 無話無談（短） | ≪作家≫88－10 |
| 述平的浪漫故事（短） | ≪作家≫88－10 |
| 灰臉人（短） | ≪作家≫88－10 |
| 想起那一年（短） | ≪作家≫89－3 |
| 一只怪鳥在屋頂上盤旋（短） | ≪作家≫89－10 |
| 河（短） | ≪作家≫90－1 |
| 我看這様挺好（短） | ≪作家≫90－8 |
| 飲馬河上的野鴨（中） | ≪作家≫90－9 |
| 盯住野狼（短） | ≪上海文学≫91－11 |
| 凸凹（中） | ≪収穫≫92－6 |
| 搞文学（談） | ≪文芸争鳴≫92－6＊ |
| 晩報新聞（中） | ≪作家≫93－9、≪小説月報≫93－12 |
| 某（中） | ≪作家≫94－7、≪中華文学選刊≫＊ |
| 此人與彼人（中） | ≪鍾山≫94－5 |
| 一張白紙可以画最新最美的図画（中） | ≪作家≫94－9 |
| 小説的福音（談） | ≪作家≫94－9 |

| | |
|---|---|
| 上天自有按排（短） | ≪作家≫95－5、≪小説月報≫95－7 |
| 青春期（短） | ≪山花≫95－5 |
| 撮於一九七六年（短） | ≪大家≫95－3 |
| 男的問了女的（短） | ≪鍾山≫95－3 |
| 従存在到存在（談） | ≪当代作家評論≫95－6 |
| 有朋自遠方来（短） | ≪作家≫97－4 |
| 自述（談） | ≪作家≫97－4 |

単行本

≪穿過欲望≫　華芸出版社（晩生代叢書）　1995年

凸凹、晩報新聞、此人與彼人、某

≪有話好好説≫　中国電影出版社　1997年

有話好好説（映画の小説化）、凸凹、此人與彼人、一張白紙可以画最新最美的図画、某、晩報新聞

脚本執筆作品

≪趙先生≫　呂楽監督、1998年作品

1998スイス・ロカルノ映画祭金豹賞受賞。98年末よりシネマ下北沢にて公開。

≪有話好好説≫　張芸謀監督、1997年作品、日本未公開

≪鬼子来了≫　姜文監督、1999年作品（共同執筆者がほかに三名）

## 中国现代文学馆开馆一周参观者逾六千人

**本报讯**　再现文学大师风采、展示现代文学精华的中国现代文学馆，开馆后参观者络绎不绝，在短短的一周多时间里，参观人数已达到六千多人。　文学报 00-6-8

中国现代文学馆地处北京东北郊，对大多数北京市民或者外地来京者来说去一趟很不容易。但是，从售票记录来看，每天平均有七百多人前来参观，还不包括许多老年免票者。

每天从四面八方赶到文学馆参观的有充满好奇的文学青年，有勤奋好学的学者，有拄着拐杖白发苍苍的老人。他们领略文学馆独特的建筑风格，欣赏"手印"、"雕塑"等十分别致的"小制作"，鉴赏品种繁多的馆藏珍品，瞻仰文学大师的生活风采，一个个都兴致盎然。而最能引起他们兴趣的是"中国现当代文学展"和十八位作家的模拟书房。参观的人流在这两个地方只能缓慢地向前"蠕动"。

有一对从天津来的老夫妇到北京旅游，住在北太平庄，早晨七点多就起来搭车，他们从报纸上得知文学馆在亚运村东边，前后花了近四个小时才找到文学馆，令工作人员十分感动。